

軽度知的障害児へのソーシャルスキル・トレーニングの効果(2) — 動的学校画 (KSD) からの考察 —

小西 一博*・稲垣 応顕

Effect of Social Skills Training for Children Who has Slight Intellectual Disabilities (2) : Consideration from Kinetic School Drawing (KSD)

Kazuhiro KONISHI and Masaaki INAGAKI

本研究では、ソーシャルスキル・トレーニング (SST) が知的障害児へもたらす効果を、動的学校画による検査法 (KSD) を用いて検討した。その結果、SST の効果が KSD の描画上に投影されることが示唆された。KSD によって対人関係のソシオメトリがリアルに視覚的に表現され、前報で用いた質問紙による検査結果 (小西・稲垣, 2006a) には表れにくい個人の主観的な内容、つまり誰と誰の仲がどの程度改善されたかという分析が可能になった。

キーワード : 動的学校画, ソーシャルスキル・トレーニング, 対人関係, 知的障害児

Keywords : kinetic school drawing (KSD), social skill training, interpersonal relationship, children who has intellectual disabilities

1. 問題と目的

ソーシャルスキル・トレーニング (Social Skill Training : 以下, SST と略記する) は対人行動のつまづきを改善する有効な技法として広まりつつある。学校教育現場でも学級で SST を行うことによって、子どものコミュニケーション能力が育成されること (上埜ら, 2000) や、学級内の信頼関係が育ち、共感し合って相手を思いやる気持ちが育つなどの人間関係に望ましい変化がみられること (岡本, 2000) が報告されている。

小西・稲垣 (2006a) は、学級という限定した集団における特定の他者とのトラブルを起こす知的障害児 3 名への SST を計画的に教育カリキュラムの中に位置づけて行い、知的障害児に継続して適用した。その結果、自己評価、教師評価、友達評価を合計した全体的な SST 得点では有意に得点が増加する傾向が認められ ($t=3.24$, $df=2$, $p<.10$), 特に「思いやり」に有意差がみられた ($t=5.85$, $df=2$, $p<.05$)。また、pre-test 時に SST 得点が低かった対象生徒に最も効果を示した。しかし、評価方法によって SST 得点の変化に差異がみられた。すなわち、評価方法では教師あるいは友達による評価において SST 得点は増加したが、自己評価では SST 得点は減少した。

そこで、質問紙による統計的な検討だけではなく、対象生徒の心理状態や対人関係を投影させる補助的な資料

も参考にして、それらがどのように変容していったかという力動性についても分析することが課題として残された。

実際に筆者らが SST に関する先行研究を概観したところ、効果測定の際に、質問紙法だけで評価している事例が多い (例 : 上埜ら, 2000 ; 岡本, 2000, et al)。質問紙法による評価では、それぞれの質問項目に対して素直な態度の表明がなされず、その代わり、被験者自身が社会的に望ましいと思う回答をしてしまう可能性が否めない。

このことから、その個人固有の主観的な心理を他の研究手法により検討する必要があるといえよう。そこで、対人関係を投影し、被験者の感情を引き出すために開発された動的学校画法 (Kinetic School Drawings : 以下, KSD と略記する) に注目した。

KSD は Burns & Kaufman (1970, 1972) による動的家族画法を発展させたものとして Prout & Phillips (1974) によって紹介され、学校に関連する人物 (自分, 教師, 友達など) が何かをしているところを描くことにより、学校の中の対人関係を明らかにしようとした検査法である。したがって、平易に表現すると KSD は KFD の学校版であるといえよう。KSD は子どもの自己認識や教師像, 友達像, 友達関係など学校に対する態度を明らかにすることができる特長がある。

日本では、加藤 (1988) によって KFD と組み合わせ

* 高岡市立伏木小学校

た方法としてKSDが紹介された。さらに、加藤ら(1989)は、心身症、不登校、非行などの問題行動がみられるさまざまな子どもにKSDを実施し、学校に対する子どもの態度、学業観、自己知覚、対人的な問題としての教師観や友達観などが表現される傾向を示した。また、KSDの用途を応用した研究としては、不登校児(原文では登校拒否と記載)にKSDを試み、イメージの世界で「学校」を体験させるという治療的な意味合いで用いた事例がある(堀之内, 1988)。

本研究では、小西・稲垣(2006a)の追研究としてSSTの効果がKSDにどのように反映されるかについて3事例を通して検討する。

なお、KSDはKFDの描画対象を家族から学校に置き換えた類似の描画法であり、さらに小西・稲垣(2006b)によって知的障害児へのKFD適用の可能性が示されたことから、KSDも適用できると仮定したうえで、実際に評価の指標として用いた。

2. 方法

2.1 対象生徒

T県内の養護学校の同学級に在籍する中学部1年生3名(男子1名、女子2名)を対象生徒とした。全員が知的障害を有し、IQは50~70程度である。生徒達は全員、養護学校に転校するまで普通学校に在籍、日々の生活や日常会話を問題なくこなす能力を身につけている。しかし、養護学校においては学級内でトラブルが絶えず、彼らはお互いに嫌合う傾向を示している。

なお、対象生徒や実施したSSTの詳細については前報(小西・稲垣, 2006a)を参照。

2.2 実施期間

200X年5月からその翌年3月まで約2週間に1回のペースでSSTを実施した。KSDのために、SSTの開始前にpre-test、終了後にpost-testとして2回の描画を求めた。以下に分析するのは、10カ月を置いた二つの描画である。

2.3 施行の手順

このKSDの実施にあたっては、対象生徒にA4サイズの白い無地の画用紙とHB、またはBの鉛筆と消しゴムを与えた。それから、「あなたを含めて、クラスのみんなが何かをしているところの絵を描きましょう。特に、この1週間のことを思い浮かべながら、人物全体を描くようにしましょう」と指示をした。検査者はそれ以外には指示を与えなかった。制限時間は設けずに描き終えた時点で終了し、その後、描かれた人物とその人物が何をしているところかなどを質問し、記録に留めた。

2.4 分析

Prout & Phillips(1974)によると、KFDのスコアリングと解釈手続きがKSDにも当てはめて使うことができると示されている。このことから、Knoff & Prout(2000)、日比(1986)、Burns & Kaufuman(1972)によるKFDの解釈を参考にした。また、Knoff & Prout(2000)、日比(1986)、Burns & Kaufuman(1972)の解釈が異なる場合は対象生徒の学校生活の様子や養護学校の教員からの情報を採り入れ検討し、最も妥当と思われる結果を選択した。

なお、SSTの得点結果に影響を受けたKSDの解釈になるのを防ぐために、先にKSDの解釈を実施した。

3. 結果と考察

3.1 事例1(R児)

【pre-testの描画(Figure 1)】

R児は理科の授業で行った栽培活動の様子を描いた。R児だけがヒマワリの双葉にじょうろで水やりをしている。水にかかわる行為は、本人の不安や抑うつ感情と関連するものであると解釈されている(Knoff & Prout, 2000; 日比, 1986; Burns & Kaufuman, 1972)。また、自分の顔を一度消した形跡があることから、この集団での自己の存在が確立しておらず、不安定な状態であることが窺われた(日比, 1986)。そのため、集団の中であたかもリーダーのように活躍する場を描くことにより自己の存在を強調しているのではないかと推察された。

R児によれば、M児はR児の水やりの様子をただみているところであると語られた。M児を隣に描いていることから、仲良くしたいというR児の思いが窺われた。反面、M児の両足はプランターの奥に描かれており、切断されているようにもみえた。身体部分が他のものによって遮断されている表現は概して消された人物像に対する葛藤や不安の指標として考えられ(Knoff & Prout, 2000; 日比, 1986; Burns & Kaufuman, 1972)、特に足の省略は不安定な状態を意味すると言われていること

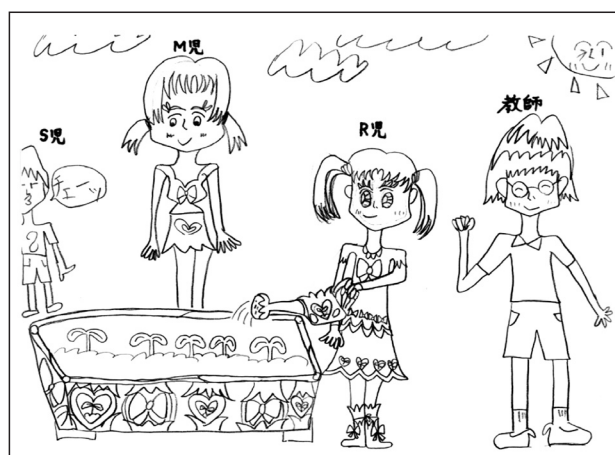


Figure 1 R児のKSD (Pre-test)

から (Knoff & Prout, 2000), M児を嫌って否認している一面も感じられた。

R児によれば, なるべくかかわりたくないと思っている存在がS児であると語られた。S児は自分の植えた種だけが芽を出していないので「チェーッ」と羨ましがっているとのことである。S児だけが欲求不満状態で描かれており, さらに, 顔の一部と右腕が紙からはみ出して描かれていた。人物間の物理的距離が遠い場合は, 関係性が薄いことを意味すると言われていることから (Knoff & Prout, 2000: 日比, 1986), S児をできるだけ遠くに追いやろうとする心理が窺われた。

筆者らが注目したこととして, R児だけが教師(第1筆者)を描いている。R児によれば, 教師は笑顔で握りこぶしを挙げてR児を応援しているところであると語られた。R児は教師を自分に一番近い位置に描いたことから, 対友達関係よりも教師との関係の方がうまくいっていることが推察された。円滑な対人関係が築かれていないため, 教室内では教師とかかわることで心理的安定を図っている現状が窺われた。

【post-test の描画 (Figure 2)】

pre-test の描画と同様に全員で共同している栽培活動の様子を描いた。R児によれば, 実際の授業ではヒマワリの種しか植えていないとのことである。R児はその出来事の延長線上においしそうなお食べ物が育っているのをイメージして描画に仕上げた。

R児によれば, R児はサクランボを, S児はきれいな花を, M児はストロベリーを, もう一人の女兒はブルーベリーを育てているところであると語られた。この女兒はSSTの授業を受けてはいないが, 同じ中学部の生徒である。そして, それぞれが自分の育てている果実を使ってジャムを作ろうと考えているところのようである。理想化した描画はみんな楽しく仲良く過ごしたいという願望充足を意味すると言われていることから (Knoff & Prout, 2000), 全体的に仲のよい対人関係に改善されつつあると認識していることが推察された。

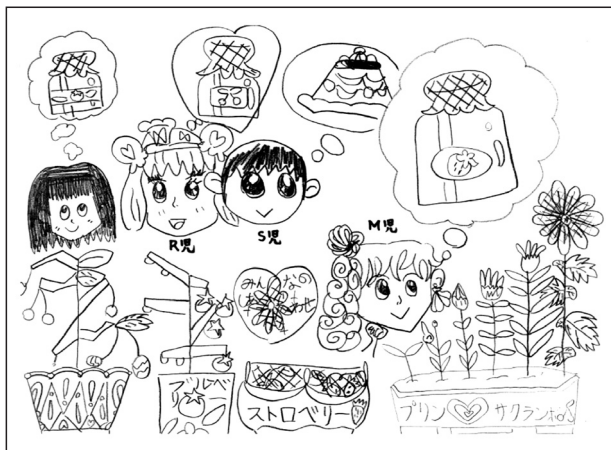


Figure 2 R児のKSD (Post-test)

この描画では全員が比較的, 接近して描かれていた。また, pre-test の描画では3人に1つのプランターであったが, 今回は一人ずつプランターが与えられていた。実際の栽培活動では, pre-test の描画と同様にみんなで共有してプランターでの栽培をしようとした。しかし, 今回は現実を反映した描画ではなく, 一人ひとりのそれぞれの思いを満たすことができるように描かれていた。さらに, それぞれが所有する果実の数が4~6個とほぼ同数であった。高橋ら(2007)によると「果実」は達成感などの肯定的感情を意味すると言われていることから, 3人ともに達成感や充実感のある生活を送ることができるようになったと, R児が認識していると推察された。

M児は, pre-test の描画よりも若干遠い位置に描かれたが, M児のジャムが一番大きく描かれ, M児の欲求を十分に満たしていると感じられた。このことから, M児に対する嫌悪感も和らいだことが推察された。また, この描画の際, M児を最初に描いた。人物像の描写順位は日常的序列を反映していることが多いと言われている (Knoff & Prout, 2000: 日比, 1986)。このことから, M児が消したい存在として捉えられているのではなく, R児にとって重要な存在になりつつあると認識していることが窺われた。

pre-test の描画の際に最も嫌うように描かれたS児が post-test の描画ではR児と重なるように描かれていた。また, S児が管理しているプランターには「プリン♡サクランボ」と描かれていた。プリンを思い浮かべているのはS児であり, つまり「プリン=S児」と解釈された。それと同様に「サクランボ=R児」を意味していると感じられた。したがって, 「プリン♡サクランボ」を解釈すると「S児とR児は好き同士である」と解釈することが可能であろう。また, pre-test の描画では, 種から芽さえ出さず, 憎悪を感じさせるような描写であったが, post-test の描画ではS児のプランターから6本育ち, そのうち1本は大きな花を咲いている描画であったことから二人の関係が改善され, 親密な関係になったことが窺われた。そして, 何よりもR児が描画作成の一番最後に「みんなのしあわせ」と書かれたハートマークを描画中央部に描いたことがクラス全体の対人関係が改善されたことを物語っていると考えられた。

3.2 事例2 (M児)

【pre-test の描画 (Figure 3)】

3人で魚に餌をあげている描画である。この描画の特徴として紙面下辺の下部線が描かれていることと大きな太陽が2ヶ所に存在することが挙げられた。紙面下辺の下部線は, ストレス下におかれて不安定であるため, 強固な基盤あるいは安定感を求めていることを意味している (Knoff & Prout, 2000: 日比, 1986: Burns & Kaufuman, 1972)。太陽はよくみられる典型的な描画で診断的意義のない場合もあるが, R児の描画

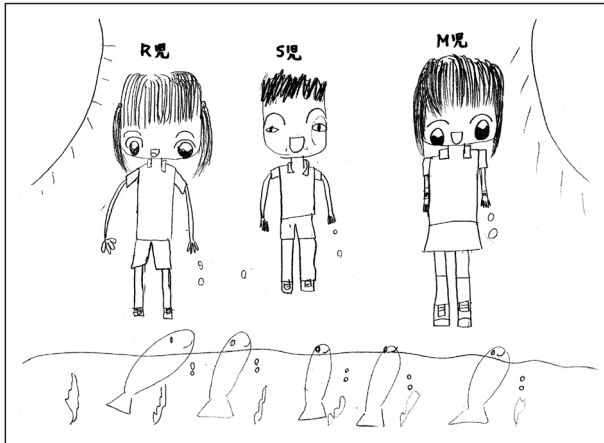


Figure 3 M児のKSD (Pre-test)

では強調するように大きな太陽が2ヶ所にあることから、暖かさと愛情への強い関心と欲求が窺われた (Knoff & Prout, 2000 : 日比, 1986 : Burns & Kaufuman, 1972)。これらのことからM児は気まずい対人関係下におり、居心地の悪さを感じていると推察された。

また、M児はR児とS児と少し距離を置いてえさをあげていることから、2人からの疎外感、仲良くなれない心理状態が窺われた。そのため、疎外感を克服するためにえさをもらう魚がすべてM児の方向を向いているように描いたのではないかと感じられた。友達からは避けられているが、せめて魚からは注目されたいというR児の心理が推察された。また、M児によれば日頃から自分は優しくて年少児のお世話をするのが好きだと語られたことから、自分よりも弱者の魚に世話をしている優しい性格を表現したと感じられた。

学級担任等からの情報によると、M児はR児が可愛い子ぶることと、R児が恵まれた家庭環境にあることに対して敵対心や嫉妬心を抱いていたため、日頃からR児をにらみつけたり、無視したりする態度をとっていたとのことである。また、その理由としてR児は目立つ存在で女優やタレントの真似をするので人気があったようである。M児も友達から注目を浴びたいと思っていたが、R児と同じように振る舞うことはプライドが許さず、その反動として冷めた態度をとっていたようである。そして、友達に対して攻撃的な言動によって自己の存在をアピールし、周りからの注目を得ようとする行動傾向があったそうである。このような心理的背景が描画にも顕著に投影されたと思われた。

日頃はR児がスカート履き、M児がズボンをはいていることが多く、描画した当日も日頃と同じパターンであった。しかし、描画では反対の衣服を身に着けて表現された。このことから、日頃強がった攻撃的な態度で友達に関わる事が多いM児だが、本当は女らしくいたいという思いを抱いていることが表現されたと考えられた。また、R児は家庭が裕福なため、親からおしゃれな小物を多く与えられている反面、M児の家庭が経済的に厳し

いために淋しい思いをしているようである。その反動として描画の中だけでもそれを満たそうとしたと推察された。

S児に対しては、顔を一度消した後に再び同じ表情を描いたことから、S児をいない存在として捉えているのではないかと解釈した。さらに、S児の口は笑っているが、S児の目は、にらんでいるように鋭くみえた。表情は直接的にさまざまな感情を表すものであり、いっそう解釈における確実な指標として考えられる場合が多いことから (日比, 1986), S児が敵対心を抱いているとM児は感じていると推察された。

【post-test の描画 (Figure 4)】

理科の授業での栽培活動の様子である。M児によれば、S児は「R児さん、かわいい」と言いながら水をあげ、R児は好きな韓国男優の事についてS児に話しながら花をみており、M児も好きな芸能人のことを考えながら花をみているところを描いたと語られた。

post-test の描画では pre-test の描画と比べて全体的な変化はみられないように感じられた。人物の行為は変わったものの、M児がS児・R児から離れて描かれ、R児を最も遠方に配置したスタイルは全く同じであった。

R児との対人関係では大きな変化がみられたとは言い難いように思われた。R児の表情は笑顔のようにみえるが、口は閉じていた。立ち位置はpre-testの描画と比べてR児をより遠方に置いた。また、実際の栽培活動では全員が同じように花を咲かせたが、描画上のM児は3本も咲いているが、R児は1本しか咲いていない。さらに、R児だけがM児とS児とは異なる目の描き方になっていた。R児だけに差をつけることによってR児を異質の存在として描写したと感じられた。このことから、R児との仲がより険悪になったことが窺われた。

S児との対人関係では、R児と同様に pre-test の描画と比べてM児とR児との二者間距離が長くなり不仲を感じさせる点もあったが、その一方で、S児との仲がやや改善されてきたと解釈された点もあった。S児の欲求

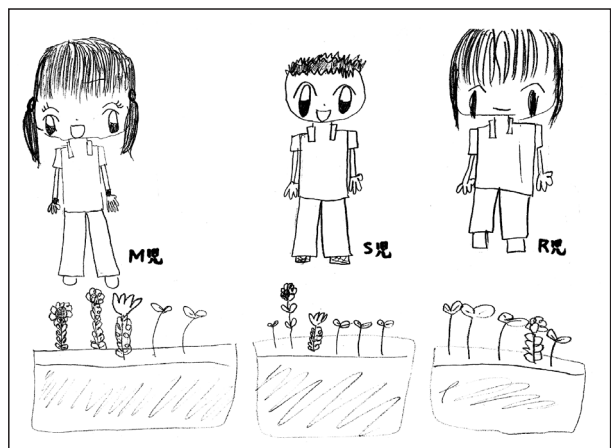


Figure 4 M児のKSD (Post-test)

を満たすかのようにS児のプランターにはM児よりも多い6本育っていた。また、pre-testの描画では睨んでいるようだったS児の目が、post-testの描画ではM児と同種の優しい目で描かれていたことから、S児は憎悪を抱いていないとM児は感じ取っていると、M児もS児をあまり嫌っていない心理が窺われた。

3.3 事例3 (S児)

【pre-testの描画 (Figure 5)】

遊園地(東京ディズニーランド)へみんな遊びに行っている描画である。しかし、S児が虐待の疑いにより保護された経緯から、遊園地に行った経験はないと思われた。その遊園地を描いた理由として、対象生徒が在籍する養護学校中学部では3年生になると、修学旅行で東京ディズニーランドを訪れることが通例となっていたことが挙げられた。S児は好意を寄せているR児の横を歩いている。R児の左手とS児の右手が接しており、手を握り合っているようにもみえた。

しかし、日常におけるS児とR児の関係はこれとは裏腹であった。学級担任等からの情報によると、S児はR児に対する好意をうまくコントロールできず、後方から抱きつくなど不適切な行為を繰り返していたようである。そのため、R児はS児を嫌い、拒絶的な態度をとることが多かったそうである。

このような現状が描画に投影され、描画上でのR児の目は鋭く、過度にかかわるS児に対して怒っている表情で描かれたように感じられた。R児に対してあまりにしつこくつきまとうので、避けられつつあった現状が描画上では手を握りたくても握らせてもらえない状態として表現されたと推察された。また、R児を自分よりも大きく描いたことからS児にとっての心理的影響度の大きさが窺われた(Knoff & Prout, 2000: 日比, 1986)。さらに、人気キャラクターのミッキー・マウスやゲーフィーもS児とR児に近付こうとしていることから2人で楽しく過ごしたいというS児の思いが推察された。

一方、M児はどこにも描かれていないようにみえるが、S児によれば『アリスのティーカップ』という遊具の中で回っていると語られた。M児を描画上から消し、さらに回転する不安定な状況に置いていたことから、M児に対して同一場面に置きがたいほどの排他的感情を抱いていることが推察された(Knoff & Prout, 2000: 日比, 1986: Burns & Kaufuman, 1972)。また、S児が自分から遠ざけた位置にM児を置いたことや、R児と一緒に正面を向いてM児から目をそらすように描いたことからR児とS児はM児を避け、嫌っていることが窺われた(Knoff & Prout, 2000: 日比, 1986)。

【post-testの描画 (Figure 6)】

みんなで調理をしている描画である。S児によれば、S児はhamと野菜を炒め、R児に対して「手伝うことはないかな」と聞いているが、R児は無視して返事をせず包丁で何か切っているところであると語られた。そして、M児はサツマイモを洗っている。

S児はpre-testの描画と同様にR児を一番大きく描き、自分をR児の横に描いた。ある人物の隣に自己像を描くことはその人物を好いており、近づきたい、あるいは注意を引きたいという表れだと推察された。さらに、S児に近いR児の左目を大きく描かれていることから、自分を注目し関心を寄せてほしいというS児の欲求が感じられた。反面、R児はS児側の左手に包丁を持っていた。刃物を持つ行為は、防衛を意味すると言われている(Knoff & Prout, 2000: 日比, 1986)。このことから、S児が一方的にR児に好意を寄せている関係にあまり変化していないと考えられた。

しかし、pre-testの描画ではS児とR児は接していたが、post-testの描画では若干の間を置いて描かれた。このことから、過度なかわりから適切な距離を置くことできるようになり、接近しすぎていた関係が少し緩和されてきているのではないかと感じられた。

一方、M児との関係にも変化がみられた。人物像を描

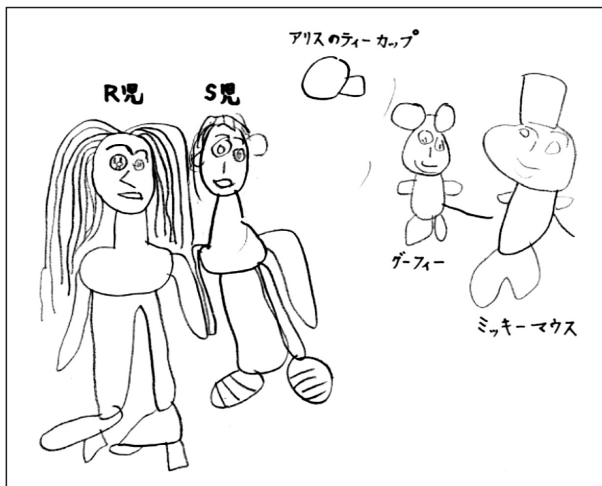


Figure 5 S児のKSD (Pre-test)

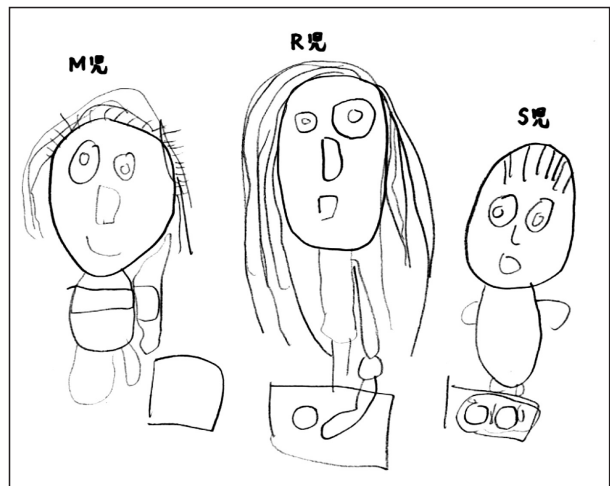


Figure 6 S児のKSD (Post-test)

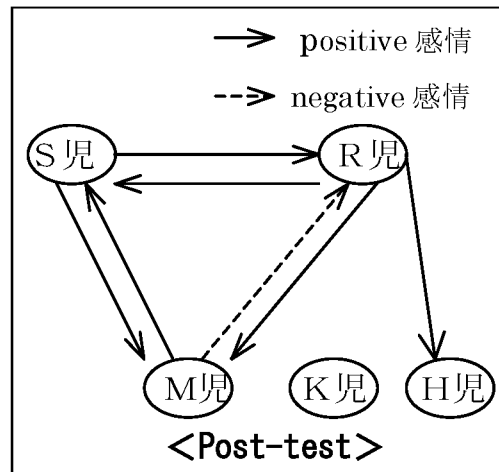
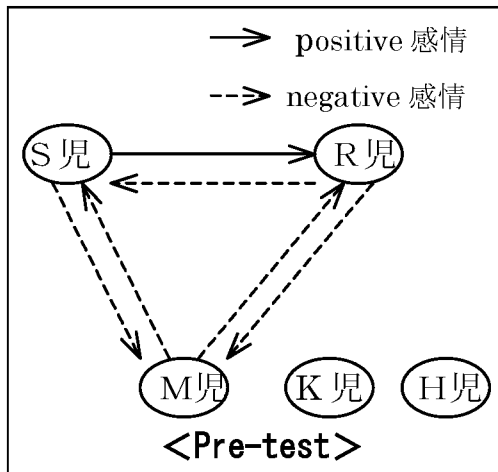


Figure 7 KSD の分析による SST 前後のソシオグラムの変化(Pre-test)

写す順序は相対的の重要性を意味していると言われているが (Knoff & Prout, 2000 : 日比, 1986), R児→M児→自分という順番で自分よりも先にM児を描いた。

pre-test の描画ではM児に対して同一場面に置きがたいほど敵意や攻撃などの否定的感情を抱き、潜在的に消去していた存在として描いていたが、post-test の描画では同一空間に、しかも笑顔にみえる表情でM児を置くことができていた。これらのことから、S児とM児との心理的な距離が縮まり、改善がみられたと推察された。

4. 全体的考察

本研究によって、SST の効果が KSD の結果に投影されることが示唆された。また、KSD による対人関係の力動性、平易に表現すると誰と誰の仲がどの程度改善されたかという解釈からSSTの効果の要因を詳細に考察することができた (Figure 7, 8)^{注1)}。

SST 得点が最も上昇した S 児は pre-test の描画で R 児への一方的な好意と M 児との不仲な対人関係を描いた。特に M 児を紙面上から消去し、否定的感情を明確に描写した (Knoff & Prout, 2000 : 日比, 1986 : Burns & Kaufuman, 1972)。この結果から、S 児の pre-test 時の SST 得点が三者の中で最も低かった要因として M 児との険悪な対人関係が影響したと推察された。しかし、S 児の post-test の描画には、笑顔の M 児が同一場面に存在したことなどから、対人関係が改善されつつあることが読み取ることができた。このことから、KSD による SST 得点の上昇は M 児との対人関係が円滑になったことが大きな要因であると推察された。

一方、SST 得点が最も伸びなかった M 児は、pre-test・post-test の描画ともに S 児と R 児から遠ざかるように描かれ、孤立感を窺われた。特に R 児に対して閉ざされた口元で否定的な感情を表現された。しかし、post-test の描画では、S 児が明るい表情で描かれたことから、S 児との仲は改善されつつあることが読み取れた。このこ

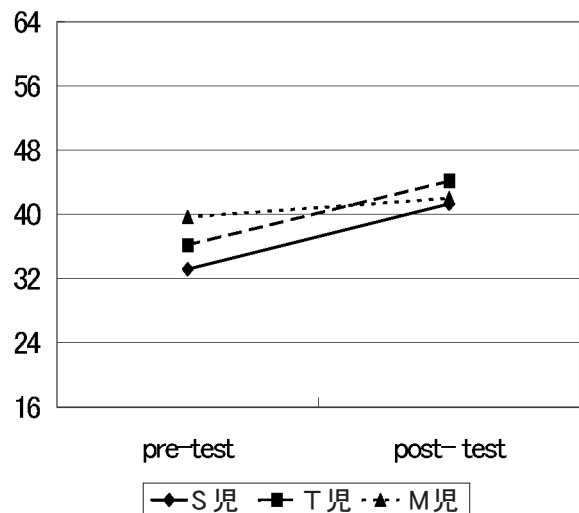


Figure 8 SST 実施前後の総合得点の変化

とから、M 児の SST 得点の伸び悩みは、R 児との関係が改善されないまま継続していたことが大きな要因であると考えられた。

R 児は post-test 時に最も SST 得点が高かったが、この結果は描画に投影されていた。post-test の描画では最も円満で温かさのある描画に仕上げた。また、R 児の SST 得点の上昇は S 児との関係が改善されたことが大きく影響したと考えられた。pre-test の描画では S 児を排除しようと紙面の端に置き、発芽しない欲求不満状態にさせていたが、post-test の描画では S 児を自分自身と重なるように描き、♡ (ハートマーク) で親密さを表現した。この結果から S 児との仲が改善されたことが SST 得点の上昇に結びつくと推察された。

5. まとめと今後の課題

SST の効果を検討するにあたり、前報で用いた標準化された指標としての質問紙では表れにくい個人の内的 (主観的内容)・質的な分析ができたと考えている。また、

KSDによって、対人関係のソシオメトリがリアルに描画上で視覚的に表現されたので、より具体的な対象生徒への援助を今後実践することが可能になった。このことから、KSDは教育相談の一助として役立つことが示唆された。

一方、KSDは子どもの主観的な内面性から対人関係を読み取る資料となり得るが、投影法による解釈には限界があり、過信しすぎないことにも注意するべきである。考察の客観性を議論して、実証性を高める方法が必要である。また、知的に障害を有し、質問紙法による心理テストが困難な子どもに対しては、日常の観察と投影法の両側面からの分析が有効であろう。

6. 引用文献

- Burns, R.C. & Kaufuman, S.H 1970 K-kinetic family drawings (K-F-D) : An introduction to understanding children through kinetic drawings. Brunner/Mazel.
- Burns, R.C. & Kaufuman, S.H. 1972 Actions styles and symbols in Kinetic family drawings : An interpretative manual. Brunner/Mazel. [子どもの家族画診断 加藤孝正 伊倉日出一 久保義和 訳 黎明書房 p28-228]
- 日比裕康 1986 動的家族描画法 ナカニシヤ出版 p44-102
- 堀之内孝久 1988 登校拒否と描画 臨床描画研究Ⅲ 金剛出版 p36-52
- Howard M. Knoff and H. Thompson P-rout 2000 Kinetic Drawing Systemfor Family and School : A Handbook [学校画・家族画ハンドブック 加藤孝正・神戸誠 訳 金剛出版 p31-67]
- 加藤孝正 1988 動的家族・学校描画システム法 臨床描画研究Ⅲ 金剛出版 p140-150
- 加藤孝正・小栗正幸・神戸誠・水谷友則・仲村正巳・小栗和子 1989 問題行動をもつ子供の動的学校画の試み 臨床描画研究Ⅳ 家族画研究会編 金剛出版 p129-145
- 小西一博・稲垣応顕 2006a 軽度知的障害児へのソーシャルスキル・トレーニングの効果 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究第1号 p77-86
- 小西一博・稲垣応顕 2006b 知的障害児施設に入所する子どもへの動的家族描画法(KFD)の試み 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究第1号 p87-95
- 岡本興則 2000 ふれあいのある人間関係づくりを目指してーソーシャルスキルトレーニングの活用を通してー平成12年度静岡県総合教育センター長期研修研究報告書 p136-145
- Prout, H.T. & Phillips, P,D 1974 A clinical note : The Kinetic School Drawing. Psychology in the Schools. 11 p303-306
- 高橋雅春・高橋依子 2007 樹木画テスト 文教書院 p46
- 上埜真知子・下山正一・尾山隆夫・坂井紀美江・山野浩平 2000 一人ひとりが生き生きと学校生活をおくることのできる人間関係づくりに関する調査研究(第3報)ー望ましい人間関係づくりをめざすコミュニケーション能力の育成ー 富山県総合教育センター研究紀要第19号 p57-84

[注釈]

注1) Figure 7は学級全体のソシオグラムである。SSTの授業を受けたのは対象生徒3名であるが、本研究で取り上げた学級に在籍している自閉性障害を有するK児とH児も記載した。この二人の生徒らは言語能力が乏しいため、対象生徒とは会話を交わすことがあまりなく、対象生徒とトラブルがほとんど起きていない実態である。

(2007年8月31日受付)

(2007年10月30日受理)